

長野氏の夢の跡と伊賀街道・長野宿

津市美里町

北長野界限

長野氏は、南北朝時代から室町時代にかけて、現在の津市の北側一帯を治めていた武士です。一族は各地に城を構え、本拠地は美里町にありました。町内の桂畑地区と北長野地区には城跡が残り、これらを「長野氏城跡(国指定史跡)」と総称しています。

時代は下り、江戸時代に入ると、津藩の藩主となった藤堂高虎は、津城下と上野城下を結ぶ伊賀街道を整備しました。この街道で難所とされたのが、津市と伊賀市の間にはだかる長野峠。峠の麓に位置する長野宿では、上野方面から峠を越えてきた旅人たちが、その疲れを癒したことでしょう。

今回は「長野氏城跡」の中で北長野地区にたたずむ「西の城跡」「中の城跡」「東の城跡」と、伊賀街道の長野宿をめぐるります。

取材・文：中村真由美

「美里ふるさと資料館」

今回の散策の基点となるのは「美里ふるさと資料館」です。車で来館の場合は、伊勢自動車道「津」ICから20分程度、公共交通機関を利用する場合は、近鉄「津新町」駅前から三重交通バスに乗り、バス停「長野」から徒歩約5分の距離です。「まずは、美里町のことを予習してくださいませ」と、館内に案内されると、町の歴史が時系列で紹介されているほか、文化財・民具なども展示されています。



「美里ふるさと資料館」展示風景



智永寺
側は北畠氏、
北側は伊勢守

室町時代に
なると、かつ
ての伊勢国は
雲出川付近を
境として、南
築いていきま
した。

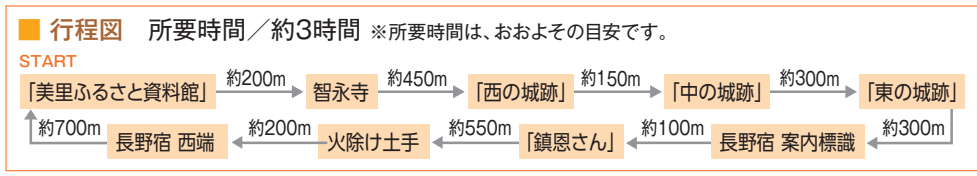
した。展示資料や説明によると、長野氏は鎌倉時代に伊豆を本拠地とした工藤氏の一族ともいわれ、町との関わりは鎌倉時代後期にまで遡ります。少なくとも南北朝時代には桂畑地区の標高約520メートルの山頂に城を築き、本拠地としていたようです。同時代の軍記物語『太平記』には、この城が要害堅固なため、寄せ手がなかなか近寄れなかったことが記されています。その後、勢力が拡大するにつれて、北長野地区の3つに連なる丘陵の頂上(標高約200



長野城跡



今回の案内人は「美里ボランティアガイド会」会長の山本 茂樹さんと伊藤 キヤ子さん。山本さんの博識と、伊藤さんの健脚には驚かされました



長野氏の夢の跡をたどる

智永寺に別れを告げて東へ進むと、山中へと入る細い道が現れました。ここからは、すべりやすい場所や倒木などに気を付けながら進みます。すると、15分程度でササが生い茂る「西の城跡」頂上に到着。この「西の城跡」頂上からは、

幕府から任命された守護の力は弱く、実際には長野氏や関氏などの国人領主がそれぞれの地域を支配し、均衡を保っていました。なお国人とは、在地性の強い領主層のことで、国衆とも呼ばれます。「では、城跡へ向かいますが、途中には智永寺があります」との話で、同館を後にします。住宅地を歩くと右手に見えてきたのが、お話の智永寺です。開山は、寛正元(1460)年。長野家10代当主の政藤の妹が開いたと伝わり、2月の初午会では、厄年に当たる人が祈願に訪れ、ミカン・菓子・餅などを撒く風習が続いています。



長野宿の家並み



火除け土手の石垣

場跡に行き、『鎮恩さん』を見ておきましょう」と案内されて、少し南に向かいます。「鎮恩さん」とは、処刑された罪人の霊を供養するために地域住民が建てた小さな祠で、今も5月には供養祭が営まれていると伺いました。

「鎮恩さん」に手を合わせた後は、長野宿へ。藤堂高虎によって官道として整備された伊賀街道は、全長約12里(50



「鎮恩さん」

キロ)の道程です。地域の人々は、宿場町として賑わった通りを今も「マチ」と呼んでいるといいます。お話を聞きながら、町の中央あたりまで進むと、大きな説明板が見えてきました。「江戸時代末期から明治初期の様子を復元した図ですが、紺屋・伊勢屋・油屋などの屋号が今も残っています」と教わります。すると、火除け土手という文字が目に残りました。火除け土手とは、文字通り火事を防ぐために築かれた土手のこと。同宿は、度々火事に見舞われましたが、中でも正徳4(1714)年の大火事で大半を失ったことから築かれた

といえます。その規模は、高さ約4メートル、幅は約16メートル。長さは道を挟んで北側が約24メートル、南側は約17メートルもあり、周囲は石垣で囲んでありました。この土手を挟んだ反対側に問屋と庄屋を配置することで、もし火事が発生しても、両方が同時に焼失するのを避けたのです。残念ながら、現在は北側の石垣の一部を残すのみとなりましたが、当時の人々の切実な想いが伝わります。

長野氏の夢の跡と長野宿をめぐる散策は、火除け土手からさらに西へと進み、家並みが途切れたあたりで終了です。終点となる「美里ふるさと資料館」へは歩いて10分程度の距離。バスを利用の場合は、再びバス停「長野」から三重交通バスに乗るのが便利ですが、本数が少ないため、事前に時刻表を確認しておくとういでしょう。

問「美里ふるさと資料館」

TEL 059-279-3501

TEL 059-279-3501



「西の城跡」頂上



「長野城跡」遠望



「中の城跡」頂上



「東の城跡」頂上周辺

尾根伝いに東へ数分行くと、少し展望が開けた場所が出現しました。「ここは見張り台で、向こうに見えるのが『長野城跡』です」と指し示す方に目を向けると、鉄塔が建つ山が望めました。「昔は、ここから狼煙をあげて合図をしたのかもしれないですね」と話す伊藤さんからは、長野氏を誇らしく思う気持ちが伝わります。

約3.5キロメートル先にたたく「長野城跡」を想像した後は、約5分で「中の城跡」へ。頂上は想像以上に広く、中世の山城特有の土塁跡などが確認できました。この「中の城跡」から最後の「東の

城跡」までは約30分。少し長い距離ですが、苔むした丸太橋などは幻想的で、気分よく歩きました。

今回の城跡めぐりは、西から始めましたが、実際に築かれた順番は東が最初だったようです。いずれにしても、各城跡は、その後の長野氏の盛衰を見届けることとなりました。室町時代に一応は安定していた伊勢国の勢力分布は、応仁元(1467)年に「応仁の乱」が起きたことで崩れ始め、国人領主たちの勢力争いが激しくなったのです。長野氏も一時は桑名まで進出したものの、撤退を余儀なくされ、永禄元(15

58)年に北畠氏に服属することになった。約10年後の織田信長の伊勢侵攻によって滅亡という運命をたどるのです。

「城山」と呼ばれる「東の城跡」では、ヤブツバキの赤い花が、心なしか悲しげに見えました。

長野宿と火除け土手

「東の城跡」を後にして山道を下ると、突然視界が開け、国道163号線に合流しました。すると「これより長野宿」の案内標識が目に残りました。

「ここから西へ歩けば長野宿へと入りますが、その前に寄り道して昔の処刑